

職員のみなさんへ一言メッセージ (第110回)

みなさんこんにちは、夜に読んでいる方には、こんばんは。5月が終われば、真和館の決算理事会も終わり、いよいよ、新しい年への台頭が始まります。

6月初めに、職員のみなさんにも、平成27年度はどんな仕事に重点的に取り組むかのか目標を立てていただくこととなります。

ところで、最近、アドラーの心理学が、人気急上昇中で、アドラーの本が書店の棚に並んでいます。その中の一番やさしそうな本「勇気の心理学アルフレッド・アドラーが1時間でわかる本(中野明著)」を読みましたので、みなさんに、そのエキスを2回に亘りお伝え致します。

アドラーは、「人間であるとは劣等感を持つことである」と述べています。人が持つ器官や特徴、行動を他の人と比較した場合、劣っていると判断を劣等性と言います。この劣等性に対して負い目や恥を感じると、これが劣等感となります。考えてみますと、人間は地球上に存在する生き物と比較すると、大きな体や運動能力を有するわけではありません。そこで、人類は、生物的劣等性を補うために集団を形成するようになりました。防御や攻撃のために創造した道具、体力の代わりに発達させた知性、これも劣等性を補うための工夫です。

個人が持っている劣等感が正しい方向に向かうか、負の方向に向かうかは、物事を考える時、楽観的に考えるか、悲観的に考えるかで左右されるそうです。楽観的に考えるのが、劣等コンプレックスに陥らない秘訣としています。

さて、善因善果、悪因悪果という言葉があります。すなわち良いことをすれば良い結果が、悪いことをすれば、悪い結果が生じるという考え方です。

これに対して、人の行動は、その人が持つ目的や目標に従った結果だと考える立場があります。前者を決定論、後者を目的論と呼びます。

目的論に立てば、たとえばもし世の中に、何かを作る時に必要な材料、設備、人手、権限が有ったとしても、目的、すなわち「このようなものを作ろうという目標が無ければ、手元にいくら素材があってもなんの役にも立ちません。

アドラー心理学は、この考え方を人の「生き方や性格」にも適用し、人が生まれつき持っている素質よりも、それをいかなる目的に従って、どう使うかに注目します。「上手に出来ないのは、素質のせいだ」と考えるのが決定論です。これに対し、「上手にできないのは、誤った目標のせいではないか」「素質の使い方を間違っているのではないか」と考えるのが目的論です。アドラーは、重要なのは素質ではなく、自分が持っている素質を「いかに」使うかである。「いかに」を考えるには、目標が必要になると言っています。

真和館でも毎年2回、6月と12月に半年間の仕事の目標を、目標管理シートに書いて頂き、面接をしています。みなさんの成長ぶりが楽しみです。

平成27年5月25日 真和館施設長 藤本和彦